



Title	サハ語における肯否の対称性と否定を含む派生
Author(s)	江畑, 冬生
Citation	北方言語研究, 5, 5-13
Issue Date	2015-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58322
Type	departmental bulletin paper
File Information	02Ebata_tokushu.pdf



[特集 否定構造]

サハ語における肯否の対称性と否定を含む派生 *

江 畑 冬 生
(新潟大学)

1. 概要

サハ語の動詞は「語幹－派生接辞－否定－動詞語尾－人称・数」という形態法をとる。肯否は、否定接辞 *-be* または *-(i)m* の有無で表される¹。否定接辞は、動詞語幹に最も近い位置に現れる屈折形態素である。サハ語の否定接辞の付加は極めて規則的であり、ほとんどの動詞語尾に否定接辞が先行しうる。(1)の動詞語幹に後続しているのは、受身を表す派生接辞、否定接辞、直説法現在の動詞語尾、主語の人称・数を標示する接尾辞である。ただしこの例では、否定接辞と動詞語尾が形態的に融合している。このように、動詞語尾は先行の否定接辞と形態的に融合することがある。

- (1) *buhaar-ullu-bat-tar*
解決する-PASS-NEG:PRS-3PL
「それらは解決されない」

本稿ではまず、サハ語動詞における肯否には高い対称性が見られることを示す。次に、サハ語において否定要素を含む派生が生産的であることを示す。このとき、単に否定の意味が保持されるだけではなく、否定要素がなおも統語的な力を失っていないと主張する。

2. 否定の文法的性質

一般言語学的に、否定を文法範疇として位置づけることは難しい。Bybee (1985: 176) は、否定がムードとの近接性 (“its affinity to other mood meanings”) を有することを指摘している。ただし同時に、否定はムード範疇のメンバーではなく、*speech act* の一種でもないと述べる。Whaley (1997: 227) も同様に、否定はムードの 1 つなのではなく、(証拠性と同じく)

* サハ語 (ヤクート語) はロシア連邦のサハ共和国を中心に分布するチュルク系の言語であり、その話者数は約 45 万人である。サハ語は膠着的な形態法を有する接尾辞型の言語である。接尾辞は、母音調和と頭子音交替により 8~16 種の異形態を持つことが普通である。ただし本稿では、接尾辞の異形態を捨象し代表形のみを示している。本稿は、日本言語学会第 149 回大会ワークショップ「北東ユーラシア諸言語における否定構造」における口頭発表に加筆修正したものである。本研究は、科学研究費「チュルク諸語北東グループ未解明言語の調査研究：包括的記述と史的変遷の解明」(課題番号 26704004) による研究成果の一部である。本稿を完成させるにあたり、匿名の査読者、ならびに新潟大学人文学部の 2014 年度「言語学演習」受講生諸氏からは極めて貴重な助言を頂いた。深く感謝申し上げる。

¹ 否定接辞の 2 つの形態は、同一接辞の異形態であると見なせる。すなわち後続接尾辞が子音始まりであれば *-be* が現れ、後続接尾辞が母音始まりであれば *-(i)m* が現れる。ただし表 1 に見るように、この規則だけでは説明の付かない場合もある。否定接辞が後続の動詞語尾と形態的に融合しているため、否定要素のみを形態素として取り出しにくいケースもある。Erdal (2004: 229) によれば、Old Turkic における否定接辞の形態は *-ma* である (原音素 /a/ は、/a/ または /ä/ で実現する)。対応するトルコ語の否定接辞は *-me* であり、トゥバ語の否定接辞は *-be* である (いずれも母音調和等による異形態を捨象してある)。

独立のカテゴリとして捉えられるものだとする²。Dixon (2010: 137) は、否定をどのように扱うのかは言語ごとに大きく異なるものだと記述している。

しかしながら否定は、他の文法範疇と密接に関わっている。Palmer (2001: 52) は否定と認識モダリティとの関連を論じており、さらに Quirk *et al.* (1985: 83-84) および Palmer (2001: 173) では、否定が疑問と共に非現実 (irrealis) として扱われるケースを挙げている。一方で否定は、しばしば未完了アスペクトとも結びつくものである。例えば風間 (1997) は、エウェンキー語の不定対格が否定を含む未完了アスペクトと関係すると指摘する。

3. 動詞文の否定における対称性

Payne (1985) や Miestamo (2007) は、「主節・平叙文・動詞文を否定する基本的手法」を Standard Negation と呼んでいる。サハ語の Standard Negation は、動詞語尾の直前に否定接辞が現れることで表される。動詞文(2)に対応する否定文は(3)である。ただし先の(1)と同様に(3)でも、否定接辞と動詞語尾が形態的に融合している。

(2) *on-u* *bil-e-bin*
 あれ-ACC 知る-PRS-1SG
 「私はそれを知っている」

(3) *on-u* *bil-bep-pin*
 あれ-ACC 知る-NEG:PRS-1SG
 「私はそれを知らない」

表 1 に、動詞 *et* 「言う」を例として、すべての動詞屈折形式について肯定と否定の形式を示す。定動詞（主節述語の形式）では 2SG を主語とする形式を、形動詞（連体節述語・名詞節述語の形式）および副動詞（副詞節述語の形式）では人称・数の標示が無い形式を示すことにする³。

表 1 に見るように、サハ語の動詞屈折形式の多くには対応する否定形が存在するため、形態的な対称性は際立っている⁴。例外的に非対称を示すのは、次の 2 つの場合である。[1] 定動詞の直説法未来において、否定は *suoka* (*suox* 「いない/ない」に 3SG 所有接辞が付加したものと分析可能) による迂言的形式を用いる。[2] 形動詞の肯定には過去と中立の形態的区別があるが、否定では両者が同形となる。

² Dixon (2012: 89-137) でも、否定は他の文法範疇とは独立に記述されている。ただし Givón (2001: 301) のように、否定を認識モダリティの 1 つとして扱う (presupposition / realis assertion / irrealis assertion / negative assertion) ものもある。

³ サハ語の定動詞は、もっぱら主節述語として現れる動詞屈折形式である。形動詞は、連体修飾節または名詞節の述語として現れる（一部の形動詞は主節述語としての用法も持つ）。副動詞は、もっぱら副詞節述語として現れる。サハ語の動詞屈折形式については江畑 (2013) も参照されたい。

⁴ 同系の言語と比べても、サハ語の動詞屈折形式における肯否の対称性は高い。例えばトゥバ語（南シベリアで話されるチュルク系の言語の 1 つ）では、形動詞-*galak* 形（予期・必然未来を表す）や副動詞-*bušaan* 形（同時進行を表す）は否定接辞と共に起しない。また副動詞-*pajn* 形は 3 つの副動詞の否定形に相当する。

〔表 1〕 動詞屈折形式における肯定と否定

		肯定	否定
定動詞	直説法現在	et-e-kin (言う-PRS-2SG)	ep-pek-kin (言う-NEG:PRS-2SG)
	直説法近過去	et-ti-ŋ (言う-N.PST-2SG)	ep-pe-ti-ŋ (言う-NEG-N.PST-2SG)
	直説法遠過去	ep-pit-iŋ (言う-D.PST-2SG)	ep-petek-iŋ (言う-NEG:D.PST-2SG)
	直説法結果過去	ep-pik-kin (言う-R.PST-2SG)	ep-petex-xin (言う-NEG:R.PST-2SG)
	直説法未来	et-ie-ŋ (言う-FUT-2SG)	etieŋ suoxa (迂言的形式)
	命令法現在	et (言う:IMP-2SG)	et-ime (言う-NEG:IMP-2SG)
	命令法未来	et-eer (言う-IMP.FUT-2SG)	et-im-eer (言う-NEG-IMP.FUT-2SG)
	条件法	et-ter-gin (言う-COND-2SG)	ep-pe-ter-gin (言う-NEG-COND-2SG)
	危惧法	et-eeje-kin (言う-APPR-2SG)	et-im-eeje-kin (言う-NEG-APPR-2SG)
	確信法	et-iihi-gin (言う-CONV-2SG)	et-im-iihi-gin (言う-NEG-CONV-2SG)
形動詞	現在	et-er (言う-VN.PRS)	ep-pet (言う-NEG:VN.PRS)
	過去	ep-pit (言う-VN.PST)	ep-petex (言う-NEG:VN.PST) (言う-NEG:VN.NEUT)
	中立	et-tex (言う-VN.NEUT)	
	未来	et-iex (言う-VN.FUT)	et-im-iex (言う-NEG-VN.FUT)
副動詞	共起	et-e (言う-CVB.SML)	et-imine (言う-NEG:CVB.SML)
	継起	et-en (言う-CVB.SEQ)	ep-pekke (言う-NEG:CVB.SEQ)
	目的	et-eeri (言う-CVB.PURP)	et-im-eeri (言う-NEG-CVB.PURP)
	即座	et-eet (言う-CVB.IMM)	et-im-eet (言う-NEG-CVB.IMM)

4. 非動詞文の否定における非対称性

動詞以外の述語を持つ文を、非動詞文と呼ぶことにする⁵。サハ語の非動詞文では、肯定文に単純に否定要素が付加されるわけではない。つまり動詞文の場合とは異なり、肯否が対称的ではない。非動詞文では3つの非対称性が顕著である。

第一に、存在文の述語には *baar* 「いる/ある」が用いられるが、その否定には *suox* 「いない/ない」が用いられる点を挙げることができる。つまり、存在と不在は一種の補充法により表される。本稿では例を省略する。

第二に、名詞述語文において、肯定文では(4)のように主語の人称・数に応じたコピュラ接辞が用いられるが、否定文では(5)のように動詞 *buol* 「なる」による迂言的形式を用いる(この時、動詞は過去時制の形式であるが意味は現在である)。

- (4) *min* *illey-min*
 1SG 暇-COP.1SG
 「私は暇だ」

⁵ サハ語の非動詞文には、主語の人称・数を標示するのにコピュラ接辞を用いるという共通性がある。

- (5) *min illey buol-batax-puun*
 1SG 暇 なる-NEG:R.PST-COP.1SG
 「私は暇ではない」

第三に、未完了「まだ～しない」を表す専用の述語形式「共起副動詞 + *ilik*」が存在する。このときの述語 *ilik* には、名詞述語文の場合と同様、主語の人称・数に応じたコピュラ接辞が付加される（従って未完了を表す述語は、意味的には動詞文だが形式上は非動詞文となる）。

- (6) *min on-u aav-a ilik-pin*
 1SG あれ-ACC 読む-CVB.SML まだ-COP.1SG
 「私はそれをまだ読んでいない」

5. 否定代名詞

サハ語の否定代名詞は「疑問詞 + 接語=*da*」により形成される⁶。例えば、疑問詞 *kim* 「誰」から *kim =da* 「誰も（～ない）」が、疑問詞 *xanna* 「どこ」から *xanna =da* 「どこにも（～ない）」が作られる。否定代名詞は、否定要素を含む述語と共起し呼応することで全部否定を表す⁷。なお(7)に示すように、格接辞は疑問詞に直接付加される。

- (7) *tug-u =da bil-bep-pin*
 何-ACC=CLT 知る-NEG:PRS-1SG
 「私は何も知らない」

6. 否定を含む動詞語幹からの派生

サハ語の形動詞には、派生接辞が後続しうるという特徴がある⁸。第3節でも述べたように、形動詞接辞には否定接辞が先行しう（一部は融合している）。否定の形動詞にも、派生接辞が後続しう。つまりサハ語では、否定を含む派生が可能である。形動詞に後続しうる派生接辞は3つある。以下では、コーパス資料から得られた用例に基づき検討を行う⁹。

6.1 形動詞 + 副詞派生接辞-*tik*

接尾辞-*tik* は名詞語幹に付加し、副詞を派生する（本稿では名詞形態法を施しうる語幹を総称して名詞語幹と呼ぶ）。この接尾辞による副詞派生の例には *tyrgen-nik* 「速く」（＜ *tyrgen* 「速い」）、*čepčeki-tik* 「簡単に」（＜ *čepčeki* 「簡単な」）などがある。

⁶ 接語=*da* は、平叙文では累加「も」を表す。述語に後続した場合には、逆接や譲歩を表すこともある。

⁷ 「否定要素」には、動詞語幹に付加される否定接辞だけでなく、第4節で扱った不在を表す述語 *suox* および未完了を表す述語 *ilik* が含まれる。

⁸ 屈折接辞の外側に派生接辞が現れること（換言すれば、屈折形式が派生の入力となること）自体が、類型論的に見て興味深い現象であると言える。この点については江畑 (2012b) において詳しく論じた。

⁹ 筆者が用いたコーパス資料はサハの週刊新聞 *Эдэр саас* 紙（1999年7月～2001年6月）および *Кылым* 紙（2006年11月～2009年8月）の電子版を基に作成したものであり、約160万語から成る。

否定の形動詞にも副詞派生接辞-*tik* が付加することがある。筆者の作成したコーパス上では、形動詞現在否定からの派生が 29 例、形動詞過去否定からの派生が 2 例見つかった¹⁰。従って、(8)のような否定を含む派生は、サハ語においては決して例外的な現象ではないと言える。

- (8) *žaxtal-lar* *salgu-bat-tuk* *kepsii-l-ler*
 女-PL 飽きる-NEG:VN.PRS-ADVLZ 語る-PRS-3PL
 「女たちは飽きることなくおしゃべりしている」

形動詞現在否定からの派生を含み、かつ(9)のように否定代名詞と共起する文が 3 例見つかった（否定代名詞としてはいずれも *xahan =da* 「決して」が用いられている）。これらの例においては、派生の語基中に含まれる否定要素が単に意味的に残存しているだけではなく、否定代名詞と呼応して全部否定を表すという統語的な力をなおも有している。

- (9) *xahan =da* *sæly-bet-tik* *xolboo-but-a*
 いつ =CLT ほどける-NEG:VN.PRS-ADVLZ 結ぶ-PST-3SG
 「彼(女)は決してほどけないように結んだ」

6.2 形動詞 + propriative の接尾辞-*leex*

propriative の接尾辞-*leex* は名詞語幹に付加し、「～を持った」を表す派生語を形成する¹¹。この接尾辞による派生の例には *buhax-taax* 「ナイフを持った」（＜ *buhax* 「ナイフ」）、*ojox-toox* 「妻のある」（＜ *ojox* 「妻」）などがある。

否定の形動詞にも propriative の接尾辞-*leex* が付加することがある。筆者の作成したコーパス上では、形動詞現在否定からの派生を含む文が 3 例見つかった。ただし、6.1 節の(9)のような否定代名詞を含む文は見つからなかった。

- (10) *elbex* *billi-bet-teex* *sadaača-nu* *tyrgennik*
 沢山 分かる-NEG:VN.PRS-PROP 課題-ACC すばやく
 suottuo-x-taax-puut
 計算する-VN.FUT-PROP-COP.1PL
 「私たちは沢山の分からない所のある課題を素早く解かなくてはならない」

6.3 形動詞 + similitive の接尾辞-*lii*

similitive の接尾辞-*lii* は名詞語幹に付加し、「～のような/ように」を表す派生語を形成する。この接尾辞による派生の例には *taas-tuuu* 「石のような/ように」（＜ *taas* 「石」）、*eder-dii*

¹⁰ 計 31 例のうちの 13 例では動詞語幹に受身接辞を含み、残りの 18 例のほとんどが自動詞と見なせるものである。他動詞からの派生も若干存在するが、後に見るような対格目的語を保持している例は見られなかった。

¹¹ この接尾辞の用法についてさらに詳しくは江畑 (2012a) および Ebata (2014) を参照されたい。

「若者のような/ように」(< *eder* 「若い」) などがある。

否定の形動詞にも *similative* の接尾辞-*lii* が付加することがある。筆者の作成したコーパス上では、形動詞現在否定からの派生が 45 例、形動詞過去否定からの派生が 39 例見つかった。

- (11) *kuuuh-u* *itekej-betex-tii* *kær-æ* *kær-æ*
 女の子-ACC 信じる-NEG:VN.PST-SIM 見る-CVB.SML 見る-CVB.SML
 žeremej *ujjut-ta*
 PSN 尋ねる-PST:3SG

「その女の子を信じなかったかのように見ながら、ジェレメイは尋ねた」

形動詞現在否定または形動詞過去否定からの派生を含み、かつ否定代名詞と共起する文が 24 例見つかった（否定代名詞は *xahan =da* 「決して」が 18 例、それ以外が 6 例ある）。6.1 節の場合と同様、否定要素には否定代名詞と呼応して全部否定を表すという統語的な力が残っている。

- (12) *xahan =da* *tænnny-bet-tii* *taŋah-u-n* *xomun-an*
 いつ =CLT 戻る-NEG:VN.PRS-SIM 服-POSS.3SG-ACC まとめる-CVB.SEQ
 taxs-an *bar-but-a*
 出る-CVB.SEQ 行く-PST-3SG

「彼は二度と戻ってこないかのように衣服をまとめて出て行った」

次の(13)では、*kim*「誰」に対格接辞が付加されている。この対格名詞句は、明らかに *kuottar*「逃がす」により支配されている。つまりこの例では、派生の語基が全部否定を表すだけでなく項構造も保持していることになる¹²。

- (13) *buhata* *kim-i =da* *xanna =da* *kuottar-bat-tuuu*
 どうやら 誰-ACC=CLT どこ =CLT 逃がす-NEG:VN.PRS-SIM
 teriner žahanar *kuuul-lar =ebit*
 用意される 獣-PL=EVID

「[それらは] どうやら誰もどこにも逃さないように用意された獣たちなのだった」

7. トゥバ語との対照

6 節では、サハ語において否定を含む派生が可能であり、その際に否定要素がなおも統語的な力を失わないということを示してきた。サハ語の否定に関するこの特質は、同系のトゥバ語と対照することでより明確に理解される。

(14)に示すように、トゥバ語でも否定の形動詞から動詞語幹が派生されうる（なおサハ

¹² サハ語の派生におけるこのような通言語的特異性を、筆者は統語的派生と呼んでいる。統語的派生について詳しくは江畑 (2014) を参照されたい。

語を除くチュルク諸語で否定を含む派生が可能なのは、管見の限りではトゥバ語のみである)。

- (14) a. *ažulda* 「働く」 (元の動詞語幹)
 b. *ažulda-vas* 「働かない (こと)」 (形動詞現在否定)
 c. *ažulda-vas-ta* 「働かないことにする」 (形動詞現在否定から動詞を派生)

形動詞現在否定から新たに派生した動詞語幹を含む例として、(15)がある。

- (15) *dambuj* *ol* *araga* *amza-vas-ta-an*
 PSN あの 酒 味見する-NEG:VN.PRS-VBLZ-PST:3
 「ダムブイはその酒を味見しないことにした」

しかしながらトゥバ語では、派生の語基に否定要素が含まれていても（サハ語の場合とは異なり）この要素が統語的に力を持つことは無い。筆者による作例(16)は非文法的であり、丸括弧内に示したような全部否定を含む意味を表すことは無い。つまり、トゥバ語でも否定を含む派生が可能ではあるが、否定要素は語彙的な意味を表すのみである。

- (16) * *kajaa =daa* *ažulda-vas-ta-ar =men*
 どこ =CLT 働く-NEG:VN.PRS-VBLZ-AOR=1SG
 (私はどこでも働かないことにする)

8. まとめ

否定という文法範疇は、アスペクト、ムード、*speech act* といった他の文法範疇と密接な関わりを持っている。サハ語の否定は、その出現位置や派生の入力ともなりうる点から見れば、動詞的文法範疇の比較的 inner 側にあると言える。サハ語の否定の特質は、否定を含む派生が可能であり、なおかつ否定要素がなお統語的な力を失わない点である。同系のトゥバ語と対比することで、サハ語の否定要素が派生の語基中にあってもなお統語的な力を残すという特異性がより明確になる¹³。

¹³ 否定表現が統語的な力を及ぼすのか否かが言語ごとに異なる別の例として、肯定疑問文への応答表現を挙げることができる。英語の *no* は統語的な力を有しており、後続の節が否定文であることを要求する。一方で日本語の「いいえ」は単に命題内容を意味的に否定するのみであり、後続の節は肯定文でも否定文でも構わない。言い換えれば、後続の節に対する統語的な力は働かない。

略号

ACC	対格	CVB.SML	共起副動詞	PROP	propriative
ADVLZ	副詞派生	D.PST	遠過去	PSN	人名
AOR	アオリスト	EVID	evidential	PST	過去
APPR	危惧法	FUT	未来	R.PST	結果過去
CLT	接語	IMP	命令法	SG	単数
COND	条件法	NEG	否定	SIM	similative
CONV	確信法	N.PST	近過去	VBLZ	動詞派生
COP	コピュラ	PASS	受身	VN	形動詞
CVB.IMM	即座副動詞	PL	複数	VN.NEUT	形動詞中立
CVB.PURP	目的副動詞	POSS	所有接辞		
CVB.SEQ	継起副動詞	PRS	現在		

参考文献

- 江畑 冬生 (2012a) 「サハ語の所有を表す接尾辞-LEEx」『北方言語研究』2号, 73-90.
- 江畑 冬生 (2012b) 『サハ語名詞類の研究 ―接辞法と統語機能を中心に―』東京大学博士論文.
- 江畑 冬生 (2013) 「サハ語の動詞屈折形式とその統語機能」『北方言語研究』3号, 11-23.
- 江畑 冬生 (2014) 「統語的派生再論」『人文科学研究』(新潟大学人文学部) 第135輯, 1-20.
- 風間 伸次郎 (1997) 「ツングース諸語における『部分格』」宮岡 伯人・津曲 敏郎(編)『環北太平洋の言語』3号, 103-120.
- Bybee, Joan L. (1985) *Morphology. A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Dixon, R.M.W. (2010) *Basic linguistic theory vol.1: Methodology*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R.M.W. (2012) *Basic linguistic theory vol.3: Further grammatical topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Ebata, Fuyuki. (2014) The Sakha proprietive suffix -LEEx. *Tomsk Journal of Linguistics and Anthropology*. 2014. 1(3). 23-34.
- Erdal, Marcel. (2004) *A grammar of Old Turkic*. Leiden/Boston: Brill.
- Givón, Talmy. (2001) *Syntax*. Volume 1. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Miestamo, Matti. (2007) Negation -- An overview of typological research. *Language and Linguistic Compass*. 1(5), 552-570.
- Palmer, F.R. (2001) *Mood and modality*. [2nd edition] Cambridge: Cambridge University Press.
- Payne, John R. (1985) Negation. Timothy Shopen. (ed.), *Language typology and syntactic description vol.1: Clause structure*, 197-242. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph. et al. (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London/New York: Longman.

Whaley, Lindsay L. (1997) *Introduction to typology: The unity and diversity of language*. Thousand Oaks: SAGE Publications.

On Symmetric Negation and Derivation from Negative Verbs in Sakha (Yakut)

Fuyuki EBATA
(Niigata University)

In Sakha, negation is denoted by the presence of the negative suffix, which appears nearest to the stem among inflectional suffixes. Almost all verbal forms (including finite forms, verbal nouns, and converbs) can take the negative suffix. That is, Sakha is highly symmetric in terms of the polarity. This paper first shows that Sakha allows productive derivation from negative verbs, i.e., derivation including the negative suffix. There are three derivational suffixes that can follow the negative suffix: adverbializing, proprietive, and simulative suffixes. In derivation from negative verbs, the negative suffix not only conveys a negative meaning, but also functions as complete negation along with a negative pronoun. In other words, though the negative suffix is morphologically a part of the derivational base, it still has a syntactic power to form complete negation. This morpho-syntactic mismatch is idiosyncratic to Sakha, considering that such type of derivation is impossible in Tyvan, another Turkic language spoken in Siberia.

(えばた・ふゆき ebata@human.niigata-u.ac.jp)